（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和５　年　９月　５日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　商　学　部
資格・氏名　　准教授・山崎明日香
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和５年度海外派遣研究員（　短期Ｂ　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ
２　研 究 課 題

ライプニッツ思想における快苦原理の研究：快苦の計算可能性から公的分配モデルの調査

３　派 遣 期 間　　西暦　２０２３年 ７月 ２３日　～　２０２３年 ８月 ７日
４　派　遣　先　　ドイツ（ハノーファー、ベルリン）、フランス（パリ）
５　研 究 目 的

本研究は、現代の経済理論や消費者行動論で意義を獲得した功利主義の幸福計算原理の原型を、17 世紀ドイツの思想家ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ(1646-1716)の数学的な快楽原理にあることを解明するものである。この管理分配可能な快楽原理は、現代のアルゴリズムで統制された SNS の快楽増幅装置にも援用され、現代人の日々の欲望管理にも利用されている。だが、その快苦の計算可能性の構築がいかにして形成され発展してきたかという点については、解明されてこなかった。本研究では、経験主義から功利主義の快楽原理の思想的発展に至る過程で、ライプニッツの著書『人間知性新論』(1703-05) と『弁神論』(1710) で考察された快苦原理が、微分積分的な数学的観点を導入し、そのことで功利主義に先行する快苦の量化や可視化、快苦の公的な分配管理の構想を内包していた点を検証する。研究に際しては、渡航期間のドイツで開催される「国際ライプニッツ学会」で発表を行い、該当分野の研究者と議論を行う。またライプニッツ図書館およびドイツとフランスの資料館や美術館で資料収集を行う。さらにライプニッツに係るドイツの宮廷・王宮施設や文化施設で資料収集を行う。

（ 様式D-２ ）

6　研 究 概 要

個人の受容する視覚的な快苦の数値化と可視化のシステムは、従来まで功利主義の幸福計算原理として、現代の費用便益分析（Schofield 2013)や、消費者選択理論(Warke 2000)、消費者行動理論(Johnson 2022)、メディア論(Sumpter 2018)に応用され、消費者の欲望増幅と管理に利用されていることが研究されてきた。しかし、こうした「最大多数の最大幸福」の実現を理念とする功利主義の快苦原理に先行する形で、すでにライプニッツが数学的な同理論を構想していた事について見過ごされてきた。ライプニッツの快苦原理については、従来まで古典哲学のエピクロス主義および近代哲学の経験主義の影響が指摘されるのみであった(Wilson 2003; 2008)。本研究では、現代で問題化されている経済原理や社会倫理の理論の基になった快楽原理の原型が、ライプニッツの計算分配可能な快苦原理に内包されていたことを解明する。

本報告者は、これまでライプニッツの原子論的な快苦原理に焦点を当て、それが神学的な解釈のもとで、人間が最高善へ到達するための自己閉鎖的で予定調和的な世界摂理の構造を支える基盤原理として構想されたことを問題化してきた。その研究過程で、ライプニッツの快苦原理が、現代の大衆の商業的またメディア的な情動操作に援用された数学的な快苦原理の特徴に共通点があることに注目した。また、ライプニッツの快苦原理が、功利主義のそれに先行し、現代の自由主義的な快楽主義を支える原理の要素を備えているだけではなく、大衆平等的な快苦の分配管理の機能において、親和性があることに気がついた。

以上を踏まえ、本研究では、とりわけベンサムの快苦の概念および原理を比較対象としながら、ライプニッツの快苦原理を検証し、経済商業分野とメディア分野で援用された数値化された管理可能な快苦原理の原型とその現代的な意義を解明するまでを目的とする。その際に、ライプニッツの快苦の概念には、半苦痛や半快楽などの微小表象や物理の運動法則の量変化の比喩が登場し、計算可能な量化がみられる点を検証する。特に快苦の量化において、幸福を維持し増加する補完的な機能を検討するだけではなく、非帰結主義的な快苦概念の非分離性を通じた快苦の循環システムの生成と量的可能性についても明らかにする。

7　研究結果・成果

ライプニッツの『人間知性新論』（Nouveaux Essais sur L'entendement humain, 1703–1705）、および『弁神論』（Essais de Théodicée, 1710）を対象に、彼の快楽原理の定義を分析した。ライプニッツの快苦原理が関数モデルを踏まえており、そのモデルの中で計算性や分配面で、経済原理や社会倫理の理論の基盤となった功利主義の快苦概念に先んじたコンセプトを内包していた可能性を分析した。それに際して、ベンサムの『道徳および立法の諸原理序説』（An Introduction to the Principles of Morals and Legislation, 1780 完成、1789 刊行）で示された功利主義の快楽原理を定義した。その特徴である快楽と苦痛の量化を分析し、最大の快楽と公的管理を検証した。それに比較して、ライプニッツの関数的な快苦システムを検討した。そのモデルを構成する快苦の同一的源泉と神的な作用原理を考察し、ライプニッツの微分的観点を反映した快苦の量化を検証するとともに、無限の快楽と幸福感の増幅について検証した。ライプニッツの快苦原理が、現代の功利主義的な快楽主義への連続性を成していることを検討した。ライプニッツの構想した快楽原理は、功利主義を経てさらに現実化し、現代では人々の感覚的な快楽増幅装置として実践的に応用されている。ライプニッツの時代においても、こうした快苦原理の導入と管理や支配の道具にすることは、すでにその構想にあることを、分析した。

研究発表：

2023 年 7 月 31 日から 2023 年 8 月 4 日まで、ドイツ・ハノーファー市で開催された「国際ライプニッツ会議」（XI. Internationaler Leibniz-Kongress）にて、下記テーマで英語で発表した（2023 年 8 月 1 日）。

YAMAZAKI, Asuka「A Functional Model in Leibniz's Pleasure Principle: A Comparative Analysis with the Pleasure Principle of Utilitarianism」

研究論文：

研究成果として、下記の論文が刊行された（2023 年 8 月）。

YAMAZAKI, Asuka 「A Functional Model in Leibniz's Pleasure Principle: A Comparative Analysis with the Pleasure Principle of Utilitarianism」、所収『"Le present est plein de l'avenir, et chargé du passé" : Vorträge des XI. Internationalen Leibniz-Kongresses, 31. Juli – 4. August 2023』、Li, W.; Wahl, C.; Erdner, S.; Schwarze, B.C.; Dan, Y. (Eds.), Gottfried-Wilhelm-Leibniz-Gesellschaft e. V.、Band 3: pp. 542-551。

以　上